1989年9月12日発行（毎月1回12日発行）第9号1963年6月25日第三種郵便物認可

太陽

THE SUN

9

1989 no. 337

特集 新・名庭の旅

◉桃乞の庭から――梅原 猛

◉自然の小宇宙をめぐる――三宅理一

現代名庭案内

日本庭園の見方・読み方

◉好評連載 開かずの間の冒険――荒俣 宏

ヒトの原初の営みのなかで

大和山系の豊かな自然環境のなかで、自然体で創作活動を続ける辻村史朗の作品には、現代人の心を強く引きつける何かがある。自然の力を活かしきった辻村作品の魅力の源泉を探る。

文◈川瀬敏郎
写真◈大森　忠

大自然の息吹に呼応するように、その魅力を発する自然釉大壺(高50cm)

illustration:Genpei Akasegawa

▸ムービー・エクスプレス◂

大人二枚

草むらの映画館

赤瀬川原平

◆

「メジャーリーグ」「ブルー・ベルベット」
「メジャー・リーグ」アメリカ映画／一九八九年／デビッド・ワード監督／日本ヘラルド映画配給
「ブルー・ベルベット」アメリカ映画／一九八六年／デビッド・リンチ監督／松竹富士配給

子供というのはものごとの中心よりも端っこの方をよく見ている。というより、中心と同じように端っこも見ている。というより、ものごとのどともかしこも等価に見ている。だから大人に言わせると、子供は焦点が定まらないということになる。

大人はまず中心を見定めて事を処する、大人はいつも事を処するために物を見るので、必ず中心を見る。端っこは見ても役に立たないので見ない、ということになる。

子供のころ、母親に手を引かれて道端に立っていた。母親は近所の主婦と立話をしている。魚の値段がどうのとか言っている。子供の私は仕方ないので目の前の草むらを見ている。雑草の茎を蟻が登ってきていて、葉っぱがチリチリと揺れている。蟻は葉っぱの先まで来て、仕方がないので隣の葉っぱまで移ろうとしている。

世の中はそういうものだ。魚の値段も問題ではあるが、そのとき草むらでは蟻だって動いている。そういう映画を作ると面白いのにな、なんて子供のころ考えていた。Y君ともよくそんな話をしていた。

そうしたらあるのだという。Y君が観たのは「ブルー・ベルベット」という映画だそうだ。男が家の前でホースで水撒きしていて、突然脳溢血か何かで倒れる。何ごとかと思う。カメラはゆっくり近づいていって、当然男がアップになるかと思うと、そうでもなく通り過ぎて、何でもない草むらに接近していき、それもいつの間にかマイクロレンズを使っての超接写で、昆虫のモゾモゾがアップになるのだという。

「それ凄い」

「そう。何か変な映画でね」

ところが変な映画というのは入りが悪いもので、封切り館をすぐに滑り落ちて二番館三番館ならまだしも、八番館十番館という草むらの奥のようなところで映写されることになるので、いったん見逃すと探し出すのが難しい。

それをY君が見つけてきた。新宿のどこか草むら館でホラー映画大会があり、その中の一本に紛れ込んでいたのだ。

じゃあほかは捨ててそれ一本を観よう、と決めたところへ「メジャーリーグ」が来たのである。

これも観たい。二人とも日本人であるから野球は好きだ。ところが野球映画となると最近は少ないもので、しかも人間ドラマなどではなく野球のディテールをちゃんと映画にしたとなるとなお少ないもので、その点この「メジャーリーグ」は望みがある。

じゃあというので二本立てにした。

「どっちを先に見る」

「まあメジャーリーグがふつうの主食だな。ブルー・ベルベットは蟻の子みたいな珍味だから、まずちゃんと食べて、そのあと珍味でウイスキーをちびちび、だろうな」

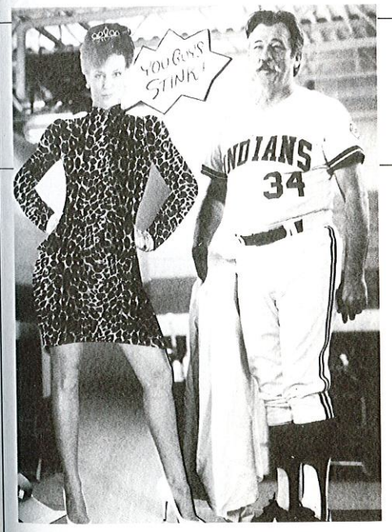
というんでお昼すぎ、まず「メジャーリーグ」を観たのである。これは面白かった。しかし前評判があまりにも面白い面白いと大変なので、その期待分だけつまらなかった。スジの進み方はあまりにもストレート。にもかかわらず最後の試合が盛り上がるのは、やはりあの五万だか七万だかのスタジアムを全部エキストラで埋めて演出したシーンのせいだろう。最近の私どもは、群衆の歓呼というものに飢えているのだと思う。

いずれにしろこういう評判の良い映画というのは、評判を聞く前にまず自分が観た方がトクするようだ。

でビールを飲んだ。次の「ブルー・ベルベッド」まで一時間ほどある。ビールを飲んで冷麺を食べた。なかなか贅沢な気分である。

さてそれでは第二弾、というので新宿の草むらを掻き分けるようにして「ブルー・ベルベット」を観に行ったのだけど、その内容についてはもうスペースがないので各自の想像にまかせる、というのがこのコーナーの特徴である。いずれにしろ多焦点の映画、というものを体験した一日だった。

（あかせがわ　げんぺい　画家・作家）



上＝「ブルー・ベルベット」、
中・下＝「メジャーリーグ」より

写真上／裸婦（デッサン）　自分の思い描いた線を自由にできるまで、幾度も習作を重ねる
写真下／北条羅漢（油絵）30号
兵庫県加西市北条にある五百羅漢に魅せられ、幾度も足を運んで描いた

引出黒茶盌の窯出しをする辻村史朗。真っ赤に焼けている茶盌を窯から引き出すタイミングがポイント

彼は個性のひかりどころをよく知っている。それは個性の殺し方を知っているということでもある。

それゆえ、約束事も何ももたず、好き一筋で突っ走ってきたという男が、自らが約束事となる時が正念場である。殺したものがこれからためされるわけである。つまり好きという「実」を、数奇という「虚」に収斂するということである。もっともこんな外野席の声など一蹴りして、「俺はただ好きでやっているだけや」という声も聞こえてくるが、外野を愉しませる力というものも、プロの器量である。

それにしても彼の暮らしぶりは、何とも自然体で豊かである。行く度に感激してしまう。

今回一年ぶりに訪れたのも、気持ちのよい快晴の日だった。いつものように奈良市内までジープで迎えにきてくれて、大和山系が伊賀の山並みに接する水間の里まで、一気に突っ走る。車が市内から一歩山へかかったとたん、景色は一変する。歴史をもった風景は単に美しいというより、自然が荘厳されている。そうした景色に心を奪われていると、突然、車一台がやっと通れるような林道に突っ込む。まさに突っ込むというのが実感で車内は道の凹凸と運転の荒っぽさとが一体となって、烈震に襲われること数分、パッと辺りが明るく開けたと思ったら到着である。

山の中腹を切り拓いたところに、二三歳の時、奥さんと二人だけで、トラックの上に寝泊りしながら、廃材を集めて二ヶ月で、つくったという母屋をはじめ、全て手造りの茶室や画室が点在している。

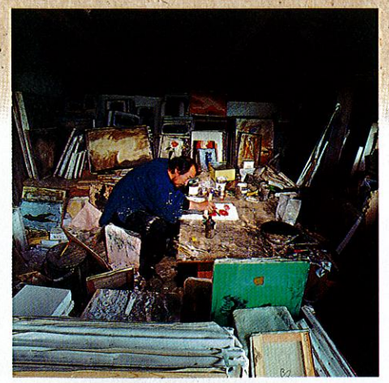
母屋の方にむかっていくと、道々にいくつかの登窯が見え、草むらのそこかしこに、やきものがほうりなげられてあるかのように置いてある。全てが自然そのものといった体だが、不思議にいなかといった感覚とは無縁である。それは彼自身も、その暮らしぶりにも一貫している。

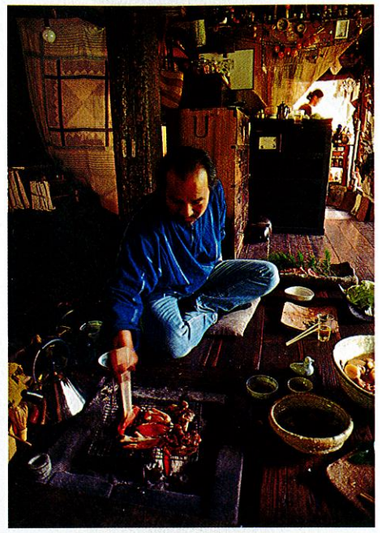
時折聞こえるウグイスの啼き声以外は、静寂が辺りを包んでいる。

つい数時間前までの東京の時間が、まるで嘘のようである。ここでは都会の時間は一切ない。人間の原初の営みの時がただあるだけである。

（かわせ　としろう　風の会主宰）

★八月二五日（金）～三一日（木）、東京・有楽町阪急八階コミュニティギャラリーで、初の絵画展「辻村史朗　絵の世界」が開催されます。





写真上／油絵が所狭しと並んでいるアトリエ。この10カ月間は、ここで精力的に絵を描き続けてきたという
写真下／奥さんの手料理が盛られると、器は一段と輝きを増す。客をもてなすに最高の雰囲気が醸される

写真上／「月見の宴」を催したりもした建物。今はアトリエになっている
写真中／自分の作った茶盌で茶を愉しむために建てたという茶室
写真下／辻村家の全景。下から母屋、茶室、アトリエ（茶室の左）とある

粗けずりな強い個性

人は誰しも好きなことをしている時が一番愉しい。その好きなことを天職としえたら、それこそ最高の幸せである。

辻村史朗はそうした幸せ者の一人である。やきものも、彼にとっては何よりも好きだからやっている。実に単純明快なのである。事実、今回訪れてみると、やきものではなく、絵が所狭しと並んでいる。実は並んでいるといった代物ではなく、彼の強烈なエネルギーそのものを見るような、凄まじいキャンバスの山である。彼にとっては、やきものも絵も、全く同じフィールドのいのちであるといっても過言ではない。聞いてみると、絵の展覧会を開くという。この十ヶ月近く、絵だけを描いていたと淡々と話す。絵がやきものの余技ではないのである。

なぜ絵を、と疑問に思ったものだが、この機会に腰を落ちつけて話をしてみると、彼はやきものよりも前に、まず絵描きを目指していたのだときいて、合点がいく。絵描きになりたかった男が、思わぬところからやきものという天職を授けられ、やきもの人生が始まった。

私は今回話をするまで、彼が得度していたことを知らなかった。十八歳の時、「絵を描くには人間が変らなければダメだ」と思い、得度したという。余程心に決するものがあったに違いない。そして東北を行脚し、坐禅しながら迷い続けて、二十歳の時、日本民芸館で彼の運命を変えた井戸茶盌と出逢う。何度も通って、「俺、これを造ってみたい」と思い、やきもののやの字も知らない人間が、井戸茶盌に導かれて、独力でこの道に入った。今も彼は「茶盌が好きやから、いくらやってもやっても飽きない」という。

初めの頃、奥さんと二人で見様見真似で登窯を造ったのはいいが、中にレンガを築いていなかったために失敗したといったたぐいの、独りで、師ももたず、やきものとぶつかった男のエピソードは、門外漢の私には笑い話で済むが、現実はさぞや大変だったろうと思う。

しかし、本当の意味で大変なのはこれからかもしれない。辻村史朗の力と技が真実生きるのはこれからなのである。粗けずりな強い個性というものは、一つ間違えば下手となる。まさに紙一重なのである。下手にならずにいるのは、彼の内なる伝統とも呼べるようなものが存在しているからだというような気がする。奈良という歴史ある風土に生まれ育ったことは大きい。

PILOT

200円の贅沢。

パイロットVペン

高価なだけが、ゼータクじゃない。ご覧のようにカラダいっぱい先進筆記メカをつめ込んだVペン、とてもとても百円玉2コで手にはいるとは思えない、表情ゆたかでゴージャスな書き味をもってます。このゼータク、味わってみたいという人は、お近くのデパート又は文具店へ！

SVP-20FW(白軸)・20FB(黒軸)
インキ色：B(黒)・R(赤)・L(青)
200円

ATTシステム
キャップ中の気密メカで、書き出しからスラスラ。

ジャンボインキタンク
たっぷり4万字分も書けるインキ量を内蔵します。

カラー水性インキ
透明窓からインキの残量がひと目で確認できます。

ハイコントローラー
ボタ落ちを追放する、インキ出コントロール機構。

特殊合金ペン
ソフトであたたかい書き味の、細字特殊合金ペン。

パイロットペン習字通信講座・会員募集中。入会随時。

※この価格には消費税は含まれておりません。

窯出し途中の窯の中。1300度近い温度で焼き続けられた陶器は、火の力を得て、さまざまな表情を生み出す